

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年十一月一日発行(毎月一回一日発行)
第十八巻第八号(通巻第二二二号)

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第212号

12. 2011

白画

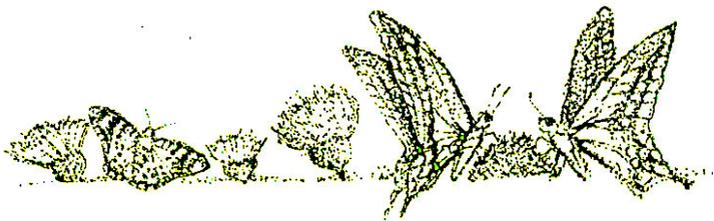
品川 鈴子

冬靄に隠れ訛と泣き黒子

六十年かかり石鎚虱の碑

除幕綱引けば菊籬の碑なり

子もなさず枯野に小さき碑を立てて



しぐれ句碑伊予の青石兄と分け

死土産落葉祓ひの小さき碑

風邪に読む白^{はく}画^がの源氏物語

仙者長者よりも律儀に枇杷の花

掃く女将運べぬ落葉の巨袋

通学に付け文されし萩の駅



玉鈴

吟

大阪 角谷美恵子

弁慶の汗か涙か板に跡
神妙に海老蔵戻る居待月
ましら酒腹より絞る芸の息
生賭して描けぬ未来凶野分立つ
遠眼鏡またも新米こぼしては

愛媛 年森 恭子

仰臥して流れ雲観る良夜かな
欄干に懸かる枯藁秋出水
洗はれて粗土あらとなり野分あと
同部屋にゐて別のことする夜長
体格に因らぬ勝敗運動会

兵庫 内藤 三男

秋灯下林望で読む新源氏
あの世より電話の来たる低血糖
点滴に遅速ありけり秋の雲
白壁の影まで燃ゆる曼珠沙華
東京へ背を向けて発つ秋の旅

兵庫 中尾 廣美

酒米の田よりあふるる稔りなり
花火見る予後の恩師と肩並べ
朝顔の萎れぬ間にとスケッチす
廊下行く素足が嬉し秋始む
紅蜀葵一日花にてかく装ふ

大阪 中島 霞

近道をポストへ急ぐ野分雲
蒼天を風が一掃曼珠沙華
目録は江戸流書式菊薫る
秋の雲手押車をしばし止め
つくつくや身辺整理急がねば

兵庫 中島 節子

還暦の茶会に参ず秋裕
たわわ柿まづは眺めて席入りす
待合に亭主の手なる柿の軸
替茶碗は元宰相作秋麗
祖父好み秋明菊の凜として

大阪 中田 寿子

糸瓜水友より貰いエゴ暮し
残暑なほ運動場の子等に酷
名月を愛でず夫は大軒
紀の国の地形崩すや雨台風
熊野川猛り狂うて秋出水

神奈川 永塚 尚代

難聴の雷雨を知らず深眠り
氷柱を削る手際やいるか生る
夕空をわがもの顔に蚊食鳥
行く夏や見守る犬の最終期
知り人の手振り嬬やか盆踊り

大阪 野口喜久子

鯉跳ねて泥巻き上げてゐる残暑
神主に祓はれてゐる赤とんぼ
小包に越後新米枕ほど
噛み合はせ悪しとろろの素通りす
衣被ぎ誰かれ遠き人となる

兵庫 蓮尾みどり

まんじゅしゃげ五百羅漢の百面相
道祖神これより霧の九十九折
しだらでん台風二つ立てつづけ
山寺の鐘まで漬かる秋出水
土砂ダムとう斯く台風に負の遺産

兵庫 長谷川 鮎

発電の水落つ管も紅葉映え
鼓笛隊競演前の色葉園
街路樹の色葉が囲む難波宮
幸村の抜け穴へ列紅葉下
大手門入れば冬日の角巨石

兵庫 林 哲夫

父忌日今年も白きさるすべり
色褪せし植物図鑑夜の秋
秋暑し次と言はれて半時間
年毎に番付上る敬老日
野分あと小さき庭の大仕事

兵庫 林 美智

敬老日盃合はす四媪
何か住むと思ひし頃と同じ月
紀伊大和押し流さるる台風禍
ひさびさに流行のもの敬老会
菊節句七十年なとせぶりの友と会ふ

愛媛 福島 松子

秋風や小犬の耳のぴんと立ち
大百足猛者三人で連れ出せり
道場の隅に控へし鬼蜻蜒
玻璃越しに睨み合ふ猫秋日和
江戸切子罅見付けをり八月尽

愛媛 福田かよ子

大樹下命果てたる蝉の高
どて南瓜とび乗る子等や展示場
シャッター音せせらぎ歩む秋日傘
病窓のベッドの日射し秋団扇
十六夜の雲を出入りしただ静か

愛媛 藤井久仁子

駅前を踊浴衣の埋めつくす
母の里畦変はらずに曼珠沙華
かなかなの耳にとどまる朝の歩
柿たわわカーブする度迫りくる
一度だけ見逃してやるおんぶばつた

兵庫 藤田かもめ

蝉の尿しとまともに浴ぶる石仏
髭題目彼方に虹の立つ浄土
望月や座敷童の影法師
狛犬の台座の辺り毒茸
秋場所の勝敗分つ鬚五寸

兵庫 史 あかり

長き夜や枕の高さあれこれと
つつましき貌つきを_{して}毒茸
エコバッグ腕にくひ込む残暑かな
出荷する目当てもなく_て稲穂垂る
窓ごとに秋の声あげ灯の点る

兵庫 古井公代

豎豆さざげ添へ供物の容調へり
マスカットのベールをそつと脱がしけり
送火のマツチふき消す西の風
雨台風龍宮城とて如何ならむ
塗り換へし校舎こだます運動会

香川 細川 知子

柏手を打ちて祈る子地藏盆
松葉杖ついて登校休暇果つ
秋涼し仏千体みな美人
盆供養養母と児の靴そろへぬぐ
缶と瓶したたかに空け盆の客

兵庫 細野恵久

寒林を鳥まつすぐに抜けにけり
冬紅葉人は離れて腰おろす
猿の子の湯冷めせしともまだ聞かず
下り際の鳩の羽ばたき落葉吹く
脱ぎしものポインセチアの鉢かくす

愛媛 松井洋子

婚約の顛末を聞く月明り
夏の星恋つらぬきし末娘
さりげなき婚約指輪秋麗
すべらかにロダンのニンフ像涼し
夏風邪の我に失せ物出ずじまひ

鈴の奏

品川鈴子選

名月とパツクの顔で相對す 兵庫 前田 玲子

パソコンの壞れてよりの夜長し

庭園灯消し満月に包まれる

秋の蚊を打てど逃げられ二度三度

生身魂喜怒哀樂は越えてをり 兵庫 吉田 耕人

若者にネジを巻きたり生身魂

生身魂時に厳しき正論も

エノケンの唄は忘れず生身魂

陸奥と言ふ戦艦ありし流れ屋 兵庫 土屋 青夢

襟首に汗疹が三つ保母先生

夏負けに句座休みては伏目勝ち

撫子を加え別れのブーケとす

帰省して鎮守の神へ大拍手 東京 松本 アイ

この杜にゲートル先生終戦日

手にあまる物は似合わぬ夏の山

乙女らは強くしなやか小撫子

スマップの老酒宴か秋の雷 兵庫 仲田 眞輔

鳴き疲れ蟬横たはるビーナス橋

ひぐらしに囲まれ出ず野天の湯

はまなすや木造駅舎独り座す

養鶏の廃業決めて盆の月 兵庫 高木 篤子

秋高し兵庫運河の船溜り

尻尾たて猫が擦り寄る西瓜好き

手習いの筆新しく今朝の秋

風渡る葡萄たわわに三木城下 兵庫 長瀬 節子

籠り居の垣根に一輪酔芙蓉

友送り帰る道の辺赤蜻蛉

ハーブの湯しほから蜻蛉一巡す

腰掛けし石ほっこりと冬日向 大阪 小菅美代子

受診室写樂が睨む大羽子板

公園の寒林よぎり子を見舞ふ

浅き春子の声路地を走り抜け

呉の秋国民服の父なりし 兵庫 長谷川とし彥

台風も日課の散歩欠かさざる

ダイケアの運動会に園児らと

起きいでて今日は見るべし寝待ち月

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 島 本知子 //

*選句は全て 品川鈴子

名月とパックの顔で相対す

前田 玲子

陸奥と言ふ戦艦ありし流れ星

土屋 青夢

パックとは美容法のひとつで、卵・小麦粉・果汁などを練り合わせ肌に塗り、血行をよくし肌をひきしめるためしばらく覆っておく。顔に塗る時は目と鼻と口だけに穴があいてまるで宇宙人のような仮面。そんなのに対面しては、お月様もさぞびつくりすることでしょう。

「陸奥」は「長門」とともに日本の力の象徴として戦前の国民に長く愛された戦艦。第二次世界大戦中原因不明の爆発事故で沈没。終戦後、解体処分された他の日本軍艦と異なり、艦体の一部が今も沈没場所にそのまま残っている。その魂の象徴のような流れ星。

エノケンの唄は忘れず生身魂

吉田 耕人

この杜にゲートル先生終戦日

松本 アイ

喜劇俳優榎本健一はエノケンの愛称で、昭和初期より浅草で活躍。舞台と映画とで一世を風靡した。その歌は誰知らぬものではなく、幸せな気分になったもの。都合の悪いことは忘れてしまふけれど、エノケンの歌だけは全部覚えていて、いつも口ずさんでいる親。その長寿の素なのかも知れない。

久々の帰省時にゲートルを巻いた先生と訪れた思い出深い杜まで出向かれたのであろうか。宅地化を免れて残っている杜は今日も戦後の日本を見つめ続けている。

鳴き疲れ蟬横たはるビーナス橋

仲田 眞輔

鳴き尽くして終える蟬の一生。路面に落ちてしまった蟬

は、もう周りの景色を眺めることしかできない。たまたま
ビーナス橋に落ちた蝉。美しい景色を愛でながら最期の時
を迎える。

手習いの筆新しく今朝の秋

高木 篤子

新しい筆を墨汁に浸す時の清清しいさつぱりとした感覚
と季語がよく似合っている。新しい筆で気分も新たに手習
いに勤しむ。

友送り帰る道の辺赤蜻蛉

長瀬 節子

遠方から来てくれた友達を駅まで送りに行つて、別れた
後に襲ってくる空虚な気持ち。楽しい時間はすぐに過ぎて
しまう。夕暮れ時の帰り道で出会った赤蜻蛉はまるで同伴
してくれているかのようにである。

腰掛けし石ほっこりと冬日向

小菅美代子

冬晴れの穏やかな日に、散歩で訪れた公園でたまたま腰

かけた石がほっこり温かかった。それだけで小さな幸せ。
石も誰かが来てくれるのを待っていたのかもしれない。

台風も日課の散歩欠かさざる

長谷川とし系

台風であつても小康状態の時間はある。その短い間に日
課の散歩は果たすという気概が立派であると思う。どんな
状況であつても自分を甘やかさない。

雲となり極楽鳥の飛ぶ良夜

野沢 光代

極楽鳥のような雲と満月。実におめでたい空である。私
は夜空では雲に注意を払ったことがない。なるほど夜の雲
も昼間と違つて見えておもしろいかもしれないと思つた。

鶏頭の束ごつんと胸に受け止める

櫻木 道代

鶏頭のもつさりとした花の束。私は束で鶏頭を持ったこ
とはないが、あの花の形からすれば、確かに胸にあたれば
ごつんとした感触が得られそうだと納得した。(以下略)